

# 茶の湯文化学会会報

No.86

第86号 / 2015年9月14日 〒606  
発行 茶の湯文化学会 -0805  
http://www.chanoyu-gakkai.jp

京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270  
生産開発科 学研究所内 FAX. 075-702-9314  
e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

## 第三十八回研究旅行・台中研修記

中村 静子  
林 順子

昨年より三年連続して台湾研修を行う予定が組まれ、今回はその二回目、熊倉功夫先生を団長、中村修也先生を副団長とし、総勢二十八名で主に台湾中部の茶産地を訪問した。

五月二十七日（水）

台北の桃園空港で全団員が合流後、東方美人茶の産地、峨眉郷に向けて出発。東方美人茶の名は、一説にはビクトリア女王がオリエンタルビューティーと命名し、その訳語から名付けられたとのこと。ウンカの被害により茶葉がダメージを受け、その結果、茶葉が変化をきたし、香気生成が促進され、蜜のような味わいとなるのが特徴とされている。昨年度の研修目的の一つに、ウンカが茶葉に付く様子の見学が含まれていたが、訪問時期が遅く、一匹位しか見られなかったとのこと。そのため、今年は時期を一ヶ月ほど早め、再度の訪問となった。

茶畑では時折雨の降る中、頭に菅笠、腰に竹籠姿の摘手が茶摘みをしており、その傍で心待ちにしていたウンカの観察となる。ウンカは薄緑色で五ミリ程の虫。最初はなかなか見つけられなかったが、注意深く観察すると、あちらこちらで確認でき、カメラにも収め、

全員大喜び。

その後、

茶畑から東

方美人茶の

製産者が経

営している

富興茶業文

化館へ移動。

茶葉の特

性や歴史の

説明があり、

東方美人茶

の試飲とな

る。比較的低い温度で短時間蒸らして淹れるとのこと、期待通りの味わいであった。

二階は茶文化の展示室で、床に開いた穴の用途が、萎凋の終わった茶葉を床に落とし、それを一階に落とす為のもの聞き、合理的な考えに感心する。茶の生産工程のビデオも拝見し、更に理解が深まる。この茶は五月から六月にかけて収穫され、販売もこの時期だけとのこと。高価な理由が改めて理解できた。



新竹峨眉山の茶畑でウンカの状況を観察

その後、台中市の客家料理店「嫩品棧」で夕食。名前の通り蒸し煮料理の店で、牛肉や豚肉と一緒に、エリンギや姫竹などの野菜が蒸し煮にされていた。鍋ごと湯煎にかけることで、煮汁が凝縮し旨味が増すとのことであった。

五月二十八日(木)

朝から雨の降る中、南投県名間郷にある茶生産会社、品香茶業に向けて出発。道中、バナナ、パイナップル、檳榔の木などを目にしながら、亜熱帯の雰囲気を感じた。到着後、社長の李麗芳氏から会社概要の説明を受ける。一九五九年操業開始、一九九八年から今の会社となり、茶の製造に加えて宣伝や販売なども行っているとのこと。工場には包装用機械、三角形のティーバッグを製造する機械などの最新設備があり、ご子息からも乾燥工程の詳しい解説があった。

その後、東方美人茶、阿里山高山茶、清香烏龍茶、凍頂烏龍茶などを試飲。多数の品種を比較して飲むことで、発酵の加減で味わいが随分違うことが良く分かった。同社の別の場所に移動し、楽しみにしていた紅茶の製造体験となる。各自、萎凋が終わった茶葉の手揉みにとりかかるも、これが思った以上に大

変な作業であった。手揉みした紅茶は、後日焙煎してホテルに送っていた。そのパッケージには茶葉と格闘している各自の写真が貼られており、思いの詰まった土産となった。



品香茶業股份有限公司で茶揉み体験

体験後、台湾を代表する景勝地、日月潭に向けて出発。日月潭は周囲三十三キロの淡水湖で、太陽と三日月が繋がった形をしていることからの命名。昼食は湖畔の松鶴園大飯店。田舎料理ながら、靈芝のスープに感激した。食後、行政院農業委員会茶業改良場魚池分場



新井耕吉郎氏たち魚池紅茶試験支所の面々

その後、日月潭の湖畔を散策し、台湾で唯一孔子の像がある文武廟を見学。夕食を日月潭飯店で済ませ、映涵飯店に宿泊。

五月二十九日(金)

廖郷長紅茶故事館に向けて出発。魚池紅茶の歴史が物語的に見学でき、茶の試飲や菓子の販売もあり、ここでしばしば寛いだ後、凍頂烏龍茶の産地、南投県鹿谷郷に向かう。途中、台湾最古の柴燒窯である水里蛇窯を見学。土煉瓦を細長く並べた登窯で、蛇の形に見えることから蛇窯と名付けられた。現在この窯を使うことは稀とのこと。道具類や作品の説明を伺った。その後、「野鴨谷餐庁」で昼食。鴨の美味しい店だった。

鹿谷郷農会茶業センターに到着後、黄筆顯村長から鹿谷郷の農業発展の歴史について説明を受ける。凍頂烏龍茶は黄金色でまろやかな味わい、甘い香りがして、さすがは台湾を代表する烏龍茶という印象。麒麟潭の湖畔から凍頂山茶畑を視察、東方美人茶と同じ製法の凍頂貴妃茶の茶畑も見学した後、宿泊先のリゾートホテルに向かう。(以上、中村静子) 五月三十日(土)

南投県溪頭の仏風ホテルを出発。海拔一一五〇m。台湾大学の試験森林地だけに緑

に囲まれ冷涼な空気。台湾の中でも有数の美しい避暑地というのも肯ける。

一路、かつて貿易で栄えた港町である鹿港へ向けバスで五〇分ひたすら下る。途中現地ガイド土さんのご家族が蒋介石に付いて台湾へ渡ってきた経緯など伺う。さながら生きた近代史。政治に翻弄された台湾の人々のご苦労を思う。鹿港で台湾最大規模の天后廟へ。道教の女神、媽祖さま(航海・漁業の守護神)が祀られている。偶然地元の祭りに遭遇。ライオンを模した黄色の獅子舞みたいな物で中に人が入り舞ったり梯子に上ったり。お神輿も出て、太鼓に爆竹にとけたたましい。亜熱帯の港町だけに一〇分おき?にスコール。混雑とハンパでない蒸し暑さに一同汗ダクダク。

紅楼にて昼飯。漁港だけに魚介類も多く基本のスープ、煮魚など大層美味。一時半、台中から台湾の新幹線に一時間程乗り台北へ。あつと言う間に感じた。

台北の柴藤蘆茶館にて台北市茶商業同公会の黄正敏先生(前理事長、現顧問)から「日本と台湾の茶業一二〇周年」をテーマにお話を伺う。茶の木は二百年前に中国福建省から移入。一八六五年には英商が台湾烏龍茶を米



媽祖廟前の演舞

国へ輸出していた。その後の日本統治時代五〇年間に民間経営とした台湾茶は発展した。茶園の開墾、製造管理法の設立、茶業伝習所日本という専門学校での若い専門家の養成等。ここでも魚池改良所の新井耕吉郎氏の話が出、誇らしく思った。その後の蒋介石の時代を経て、現在では他の農産物と同じ扱いとなり、未だ禁止されない悪習、檳榔の栽培の為の農薬散布との競合等問題も多いとの事。若い人材を育て、その人達が外へ出てお茶を作ってくれても良いから、という言葉に先ず香りを楽しむ烏龍茶への熱い思いを感じ

た。急須で茶葉を入れるのは勿論、ティーバッグも面倒、とベットボトル全盛になりつつあるのは日本も台湾も同じ。「お茶業者の未来は？」「お茶そのものの未来は？」という地球規模の話は一応お茶に携わる者には考えさせられるものだった。ご講演の前後に天梯山茶を飲みつつ茶菓子等頂く。因みにこの茶館での喫茶は二八〇〜四〇〇元。観光客対象？日本茶屋がウリのようなのだが湿度の高い台湾で豊の維持は大変らしい。



台湾製茶工業同業公会理事長の黄正敏氏の講演

兄弟ホテルにて、黄顧問、現理事長王敏超氏、日本学芸大へ留学中の張茹涵さんを迎え、

茶文化交流、例会(各地二回〜六回)、会報(No.八十五〜No.八十八)、学会誌(平成二十七年版『茶の湯文化学』第二十四号・第二十五号)、このほかに「茶の湯」が無形文化遺産(無形文化財)として認定されるようワーキング・グループ(座長・中村利則副会長)を立ち上げ、実現の方策を検討し、行動に移していくことが新たに提案された。予算案としては、会誌が前年度より年二回の発行となっていることを確認した。最後に会誌原稿投稿規程・審査規程の一部改正および役員改選について提案された。会場からは、規程の一部改正の書式についての指摘を受けた。また、会誌投稿の締切日について質問があり、一応の目安として三月と八月の二回と返答があった。以上の提案は拍手をもって承認され、総会は午後二時五分に終了した。

なお詳細については会報No.八十五掲載の平成二十七年第一回理事会報告を参照されたい。

### 【大会】

平成二十七年大会は、六月七日(日)東洋英和女学院大学大学院二階のA二〇一教室において一三二名の参加を得て行われた。十時三十分、午前の全体司会高橋忠彦理事

台湾最後の晩餐。ホテルへ着くとなんと手揉み奮闘中の写真の付いたマイ紅茶が届いており、一同感激する。帰国後の楽しみが増えた。五月三十一日(日)

最終日。林家花園を散策。台湾清時代の邸宅の典型とか。精巧な作りに精緻な透かし彫りの数々。一抱えもあるガジュマルに胡蝶蘭が自生！迷路のような庭園も素晴らしいが維持管理が大変で今は放棄、国の管理とか、納得。一路空港へ。関空と成田へ向け、予定通り其々帰路に就く。全員恙無く四泊五日の研修の旅を終える。お陰さまでした。熊倉団長、中村・瀬戸副団長、有難うございました。皆さま、次回までお元気で。

## 平成二十七年 総会・大会報告

### 【総会】

平成二十七年総会は六月七日(日)午後一時半から、大会と同じ東洋英和女学院大学大学院二階のA二〇一教室で行われた。総会に先立って、議長に吉井清理事、副議長に谷村玲子理事が選出された。

の紹介により、熊倉功夫会長の開会挨拶があり、その後、研究発表の午前の部が美濃部仁理事の司会で三題行われた。一題目は中村修也氏の「初期茶の湯における点茶法」、二題目は谷村玲子氏の「茶の湯と幕末の政局―江戸における井伊直弼の茶会―」、三題目は市村祐子氏の「戦時期における茶道―京大心茶會と廣島を中心として―」であった。

昼食と総会をはさみ午後は神谷昇司理事の全体司会で始まった。研究発表の午後の部では山田哲也理事の司会により、四題目として朴珉廷氏が「利休の逸話にみる自然体としての「そそう」の一事例」を発表された。

その後、熊倉功夫会長の司会によるシンポジウム「明治東京の茶の湯の黎明」が行われた。テーマに沿って大川三雄氏の「柏木貨一郎(探古齋)と明治東京の茶の湯の黎明」、廣田吉宗氏の「明治前期の上層階級における茶の湯―二つの日記を材料として」、依田徹氏の「八百善茶会記について」の発表があり、最後にパネルディスカッションおよび質疑応答が行われた。

午後五時半、中村利則副会長による閉会挨拶があり、閉会となった。午前からの研究発表、午後のシンポジウム

始めに平成二十六年の学会活動について田中秀隆副会長より報告があった。事業報告については、理事会(四月六日・十一月二十三日の二回)、大会(六月十四日、蕨の家「燕庵」見学会・十五日、池坊短期大学にて研究発表会ならびにシンポジウム「古田織部の茶の湯―慶長期の茶をめぐって」)、研究会(第三十七回研究会は、七月三日〜七日、台湾の茶産地訪問・茶葉改良場見学・茶園見学ほか)、例会(各地二回〜六回)、会報(No.八十一〜No.八十四)、学会誌(平成二十六年版『茶の湯文化学』第二十二号・第二十三号)など、各活動実績が報告された。また決算報告については、当期剰金はマイナス三三三、〇三一円となったが、これは会誌の発行が年二回に増えたため、今後は予算内に収めるよう努めると説明された。最後にこれを適正とする監査報告書が代読され、以上の議題について全会一致で承認された。

引き続き、田中副会長より平成二十七年の事業案と予算案が提案された。事業案としては、総会・大会(六月七日、東洋英和女学院大学大学院において研究発表・総会・シンポジウムを開催)、研究会(第38回研究会、五月二十七日〜三十一日、台湾の茶園見学・

の発表は、いずれも新鮮な視点からの興味深い研究で、今後の進展が期待されるものばかりであった、というのが参加者共通の印象だと思われる。各発表の内容については、順次会誌に掲載される予定である。

## 例

東京例会  
(平成二十七年五月二十三日)  
「日中における蠟茶と香茶」

岩間眞知子

蠟茶とその後継と考えられる香茶について、新たに見つかった日中の資料から分かったことを報告したい。

室町時代の相国寺の記録『蔭涼軒日録』永享七年の条に「誉阿を通じて(將軍・足利義教から)西芳寺に蠟茶を進上するよう仰せられた」とあり、その後の日録には將軍・義教と義政がそれぞれ西芳寺に蠟茶でなく香茶を献じる記事がある。後崇光院の『看聞日記』にも羅茶や香茶の記事が見え、「羅茶」は「ラッチャ」と読む蠟茶と考えられる。

中国の茶書に香茶は見えないが、『金史』では、薬市場の薬名に香茶を挙げ、専売品を扱う役所は塩とともに香茶も掌握して専売とする。しかし後に私販が多いために香茶の罰則を定めたなど、宋代の蠟茶と同様の法制が施行されている。

元代では忽思慧『飲膳正要』などに香茶の製法があり、『金史』も元代の著作のため、香茶は元以降の文献で見られる。そこで香茶は金や元など北方民族の言葉で、蠟茶の後継と推察される。

中世日本の輸入品目に香茶を挙げる資料は未見だが、鎌倉後期の『徒然草』は、中国からの輸入品に薬はなくてはならないと述べている。鎌倉から室町にかけて、日本は金や元から香茶を輸入していたのではないだろうか。

なお中国清代では、香茶は孩児茶の別名とされる。孩児茶とは、下痢止めや胃腸薬、口腔清涼剤の原料となるアセンヤクで、金元代の香茶とは原料が異なる。時代が下つても香茶の名称は継承し、原料はより有効な成分に変えたのであろう。

宗旦の主な援助者は江岑宗左。二十一歳の時に仕官先を求め江戸に下り、軒余曲折の末、紀州徳川家に仕官する。『南紀徳川史』によると、初めは現米八十石、その後加増され知行二百石を得る。加増後は十分な仕送りが可能となり、宗旦の生活も潤った。宗旦は紀州藩内の道具斡旋等の仕事を支え、又、東福門院、壬生忠利等からの注文を承っている。『忠利宿禰記』からは、道具の極書、斡旋等に対する報酬も分かる。宗左の紀州出仕以降の生活は満ち足りていたと考える。

#### 近畿例会

(平成二十七年七月十一日)  
「紀州藩御数寄屋頭の格式と表千家茶道について―室家を中心として」

砂川 佳子

発表は、筆者の勤務する和歌山県立文書館(以下、「当館」)紀要第十七号の同名論文をもとにしたものである。

紀州徳川家では、茶の湯に携わる役を寛政五年(一七九三)まで「御茶道頭」、それ以降は「御数寄屋頭」といい、幕末には千(以下、「表千家」)・中野・千賀・川合・室・住山の六家があった。

(平成二十七年七月二十五日)  
「煎茶」と「点茶」の語誌

高橋 忠彦

中国において、茶をいれる意味の語は、時代によって変化し、新語が常に登場してきた。中でも重要な「煎」と「点」について考えてみたい。「煎」の原義は、複数の食材を平たい鍋で炒り煮するという古代の調理法を意味するものと思われる。『周礼・内饔』で、鼎で肉を煮る「割亨(烹)」と対立して、「煎和」と呼ばれているのがそれである。この語は、後に「湯が減少するまで煮詰める」、「強火で煮る」など、多様な意味に展開する。「煎茶」の語が登場するのは唐代であるが、これは、それ以前の、宴席料理の一部として事前に大量に作っておく「烹茶」とくらべ、来客に出すために即席で茶を煮る「煎茶」が流行したためである。陸羽の茶は、「三沸」等の繊細な手順を加え、流行の茶を改良したのものであり、彼は、煮詰める意の強い「煎茶」より、短時間煮る意の「煮茶」の語を好んだ。「点」の原義はホクロであり、小さな点をつける意味に発展し、湯瓶を上下して茶に湯をさす意味になった。「点茶」は『臨濟録』に見えるが、宋代から流行した。後の泡茶法の時代に

は、茶杯に湯を注ぐことを「点」で表現するようになったが、茶壺の使用が普及してからは、「点茶」の語は衰微した。

「千宗旦の経済に関する考察―江岑宗左との関係を中心に」

中村 静子

千宗旦は乞食宗旦と称されるほど、経済的に困窮していた印象が強い。しかし、利休の孫であり、一生涯貧乏だったわけではない。経済状態を「第一期 誕生から父少庵が亡くなるまで」「第二期 体調不良による活動停滞期」「第三期 江岑宗左の紀州徳川家出仕以降」に別けて考察した。

随流齋覚書『寛永八年本』には、利休の手伝いをする宗旦と秀吉の交流が確認できる。利休自刃後は、本法寺前町に父少庵と同居し、少庵が亡くなる頃迄は、金銭的に困らなかつた模様である。

『元伯宗旦文書』には、病氣の話が頻繁に見受けられる。病氣がちな為手元不如意で、大黒茶碗を売却、圍城寺の花入を担保に借金もしている。財政困難な中、特に支出を要したのは、少庵年忌茶会と茶室の造立で、資金調達に大変苦慮している。

入を受けたのであった。



#### 東京例会

十一月七日(土) 午後二時

(会場：日本大学芸術学部/予定)

「『東都茶会記』にみる懐石料理素材の変遷」

石井智恵美氏

「未定」 下村奈穂子氏

一月三十日(土) 午後二時

(会場：東洋英和女子学院)

「未定」 砂澤 祐子氏

「布袋の仕覆について」 吉岡 明美氏

#### 東海例会

九月十九日(土) 午後二時

(会場：名古屋文化短期大学)

「江戸時代の女性の茶の湯」 谷村 玲子氏

十一月二十一日(土) 午後二時

(会場：名古屋文化短期大学)

「未定」

近畿例会

九月十二日(土)午後二時

(会場:同志社大学志高館 SK二一〇教室)

「さかい利晶の杜千利休茶の湯館について」

伊住禮次朗氏

\*他、一名発表予定

北陸例会

九月二十六日(土)午後二時~四時

(会場:越前和紙の里

「卯建(ウダツ)の工芸館」

「越前和紙について」

石川 満夫氏

卯建の工芸館

福井県越前市新在家町九一二十一

電話:〇七七八一四三一七八〇〇

駐車場:六十台駐車可

※諸般の理由から、開催日が当初の日程より遅れましたことをお詫びいたします。

金沢例会

九月十三日(日)午前九時半~十二時半

(会場:金沢市近江町交流プラザ4階会議室)

「利休の逸話から「そそう」の茶を考える」

朴 珉廷氏

「茶の湯と香道について」

伊藤 梢氏

十一月一日(日)

江戸村茶会(鋪秋の茶会)

時間:午前八時半~午後四時半

場所:金沢湯涌温泉江戸村

旧山川家住宅

参加費:三千五百円

※江戸村入館料含む/百五十名

高知例会

十二月十三日(日)午前十時~正午

(会場:高知県立文学館 慶雲庵茶室)

「茶の湯関係文献『未定』を読み

所感の発表」

茶事 正午~午後四時

席主 四名

会費 五千円

※参会希望者は予め連絡をして下さい



新刊紹介

\*『京菓子と琳派 食べるアートの世界』

濱崎加奈子(夕斐斎弘道館館長) 監修

勝冶真美 編集 淡交社

定価一、六〇〇円(税別)

\*『淡交新書 中国・韓国 やきものと茶文化をめぐる旅』

谷 晃(野村美術館館長) 著

淡交社

定価一、二〇〇円(税別)

※年会費未納の方は、同封しました払い込み用紙にて至急お払い込みくださいますようお願いいたします。

